

特別支援学校における連絡帳を通じた保護者支援

—困った行動の低減を目的とした応用行動分析学に基づく支援の効果—

宮崎 光明¹

Support for Parents through a Contact Book in a Special Needs School: Effects of Support Based on Applied Behavior Analysis for the Purpose of Reducing Behavior Problems

Mitsuaki MIYAZAKI

概要

本研究は、特別支援学校に在籍する子供の保護者が連絡帳に記入した家庭での子供の困った行動の相談について、担任の教師が連絡帳を記入して回答する形で、応用行動分析学に基づく支援を保護者に伝えた。そして、その連絡帳を通じた支援が子供の困った行動の低減につながるかについて検討した。保護者が連絡帳に記入した困った行動は、①使用済みのティッシュを新しいティッシュの箱の中に戻したり、使用済みのタオルを使用していないタオルの引き出しに戻したりする行動、②父親にひっかいたり、爪を立てたりする行動、③食事の場面で、食べ物の入った自分のお皿をひっくり返してしまう行動、④ヒーターの電源を頻繁に切る行動、⑤ペットボトルのお茶やジュース（冷蔵庫に入っている物も含む）を流しに捨ててしまう行動の5つであった。担任の教師は、これらの困った行動の低減を目的として、事前の環境調整を行う（先行刺激の操作）、困った行動と同等な機能の適切なコミュニケーション行動を教える、困った行動の後に強化となる出来事を随伴させない（消去）ための支援を具体的に連絡帳に記入した。保護者は担任の教師が記入したことを基に家庭で子供に支援を実施した結果、すべての困った行動が低減した。併せて、事後アンケートでは、今回の連絡帳を通じた保護者支援に対して肯定的な回答を得た。また、保護者が子供の困った行動に対して、応用行動分析学の視点を活用することが可能になってきたことを示唆する記述がみられた。以上より、特別支援学校における保護者支援の一つとして、子供の家庭での困った行動の低減に連絡帳を通じた応用行動分析学に基づく支援の効果が示された。

キーワード：保護者支援、連絡帳、特別支援学校、困った行動、応用行動分析学

Keywords：parents support, contact book, special needs school, behavior problems, applied behavior analysis

I. はじめに

特別支援学校では、しばしば連絡帳で保護者から家庭での子供の困った行動についての相談がある。自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder: ASD）のある子供の母親が抱える困難感の一つとして、子供との接し方や対応方法がわからず生活に支障が出るものが挙げられる（浅井・山下・加瀬，2020）。また、自閉スペクトラム症のある子供の保護者では、子供の困った行動が増加するにつれて、精神的な健康に問題が増加する（Weiss, Cappadocia, MacMullin, Viecili, & Lunskey, 2012）。それゆえ、家庭での困った行動が生じている自閉スペクトラム症のある子供とその家族への支援は、重要な支援の一つであり、喫緊の課題であるといえる。

障害のある子供の困った行動の改善を考える際に、応

用行動分析学（applied behavior analysis: ABA）に基づく支援が挙げられる。応用行動分析学は、実験的手法を用いて行動の法則を明らかにする実験的行動分析（experimental analysis of behavior）が明らかにした諸法則を、私たちの生活や臨床活動に適用する研究と実践である（大河内，2007）。また、社会的に価値のある目標を設定し、個人と環境の相互作用を分析し、問題を解決していくものである（山本，2019）。応用行動分析学では、個人と環境との相互作用を分析するために、三項随伴性（three-term contingency）を用いて考える。三項随伴性は、基本的にオペラント条件づけの手続きの中で記述され、先行刺激（antecedent stimulus）—行動（behavior）—後続刺激（consequent stimulus）の関係を用いる（中丸，2008）。これまでも、応用行動分析学に基づく支援が行われており、発達障害児等の困った

¹ 富山大学教育学部

行動の低減や適切な行動の増加、保護者の精神健康度の改善に効果が示されている。大西・丹治（2019）では、知的障害を対象とする特別支援学校において、激しい自傷行動を示す自閉スペクトラム症のある子供に対して、積極的行動支援（positive behavior support: PBS）を行い、自傷行動の低減と適切な行動が増加したと報告した。岡村（2016）では遊びをやめる際に机を蹴るなどの行動問題を示した自閉スペクトラム症のある子供に対して、高いストレスをもつ保護者に機能的アセスメントに基づく介入を家庭で実行するための支援を行い、児童の行動問題の低減と保護者の精神健康度の上昇がみられたと報告した。

家庭での子供の困った行動に対して、保護者が応用行動分析学に基づく対応を行うためには、三項随伴性による行動の見方ができること、強化随伴性（reinforcement contingency）や弱体化随伴性（punishment contingency）の知識があり、後続刺激の操作（consequent stimulus control）が行えること、また、消去バースト（extinction burst）の知識があった上で消去（extinction）が行えること、さらに、分化強化（differential reinforcement）や先行刺激の操作（antecedent stimulus control）が行えることなどが必要となってくる。保護者がこれらの基本的な対応を学ぶには、ペアレント・トレーニング（parent training）（一般社団法人日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会、2020）に参加することや、応用行動分析学を専門としている人がいる機関で、教育相談を受けることが考えられる。しかし、そのようなプログラムや教育相談を受けられる場所について知らなかったり、知っていても受けられる場所が限られていたりすることがある。また、受けられるまでに待ち時間がある可能性もある。現在では、応用行動分析学に関して書籍やインターネットで多く公開されるようになっており、これらも活用できるが、保護者が独学で獲得した知識を、正しく子供に活用できるかは定かではない。そして、これらの方法は、時間的、金銭的な負担がかかることがあったり、保護者が様々な子供の困った行動に対応できるまでに一定の時間が必要となったりする。それゆえ、家庭での子供の困った行動に、保護者が応用行動分析学に基づく対応をすぐに行うことは困難である。中・長期的に考えれば、このようなプログラムや教育相談等を受け、保護者自身が応用行動分析学に基づく対応ができるようになればよいが、現在起こっている家庭での子供の困った行動には、その行動を悪化させないために、また保護者の精神的な健康を維持するために、保護者への迅速な支援が必要である。

そこで、保護者への迅速な支援を行う手段として、特別支援学校で利用されている連絡帳が挙げられる。連絡帳は、特別支援教育の場において、日常的に使用されているなじみのあるもので、学校と家庭との連絡を日常的に展開することが可能である（阿部・佐々木・松田、

2018）。宮武・高原・足立（1989）は、特別支援教育における連絡帳の役割として、①親との信頼関係、②指導の連携や一貫性、③指導技術の向上、④指導記録、⑤発達の記録、⑥評価の情報、⑦成果の伝達を挙げている。また、中川（2013）では、特別支援学校において、家庭と学校とでやりとりされている連絡帳の記述内容を分析した。その結果、連絡帳は事務連絡としての機能だけではなく、①子供の日々の実態をより正確に把握するための記録であること、②家庭と学校が連携して指導・支援を進めていくためのツールであること、③保護者や教師が子供の支援方法について予測するためのツールとして活用できることを見出した。さらに、連絡帳の子育て機能として阿部ら（2018）は、①受容的な見方で捉えた子供の姿に関する日常的な情報の共有が子育ての喜びと意欲を引き出す、②保護者の連絡帳の記述に対する継続的な受容・共感、励まし、ねぎらいは子育てにかかる心理的な安定につながる、③保護者の子供理解と支援のための、迅速で、かつ個に応じた情報提供やアドバイスができることを挙げた。これらのことから、保護者が教師と家庭での子供の様子を共通理解するために、子供の困った行動についても連絡帳に記入することがあると考えられる。また、困った行動を低減するための支援について相談されることもあるだろう。その場合、教師は、継続的な受容・共感等をしながら、迅速で個に応じた効果的な支援を提供することで、本人および家族の生活の質を向上させ、保護者の心理的安定をもたらすことができる。また、保護者との信頼関係も向上させることができる。

そこで、本研究では、特別支援学校に在籍する子供の保護者が連絡帳に記入した家庭での困った行動の相談について、担任の教師が連絡帳を記入して回答する形で、応用行動分析学に基づく支援を保護者に伝えた。そして、その連絡帳を通じた支援が子供の困った行動の低減につながるかについて検討した。

II. 方法

1. 対象児

特別支援学校に在籍する小学部5学年の男児（以下、A児とする）。2歳6か月時、医療機関で精神発達遅滞と診断された。また、医師からは自閉的な傾向があるといわれていた。新版K式発達検査2001（生澤・松下・中瀬、2002）の結果は、姿勢・運動3歳1か月、認知・適応2歳0か月、言語・社会1歳1か月、全領域1歳11か月（生活年齢10歳3か月時）であった。A児の意思表現の方法は、手を引っ張る、実物を持ってくるという要求と、相手を押すという拒否があったが、音声やサインでの意思表現は難しかった。また、A児は気になった物を決まった場所に移動させる、水に触れるなどのこだわりが複数存在した。

A児は、学校での学習では、色のマッチング、形のマッ

チング、写真と実物のマッチング、絵カード同士のマッチング、1対1対応、スナップ・ボタン留め、音声模倣、コミュニケーションの支援等を行っていた。また、学校外で言語コミュニケーションの支援を受けており、音声指示の課題や発声練習等を行っていた。さらに、X年6月中旬より、大学の教育相談で、絵カード交換式コミュニケーションシステム (picture exchange communication system: PECS) (Frost & Bondy, 2002) による支援を開始した。

2. A 児の保護者

A 児の保護者 (以下、保護者とする) は、A 児の困った行動が家庭で起こると、連絡帳で A 児の困った行動について相談することがあった。

3. A 児の担任の教師

当時、特別支援学校の教員で A 児の担任の教師をしていた著者であった。大学院で応用行動分析学を学び修了した後、特別支援学校に勤務した。教職歴 2 年で、2 年とも特別支援学校に勤務した。保護者が、A 児の困った行動の相談を連絡帳に記入すると、困った行動についての支援を連絡帳に記入した。

4. 支援期間

A 児の担任の教師をしていた X 年 4 月～X + 1 年 3 月の 1 年間であった。

5. 使用した連絡帳

使用した連絡帳は、保護者が日付、曜日、天気、子供の健康状態、睡眠、食事、排泄について記入できる欄が設けられており (選択肢も含む)、さらに、家庭からの連絡事項も記入できるようになっていた。また、学校からは、今日の学習内容、配ったプリントの枚数、集金の依頼や受け取りの確認、提出物の受け取りの確認、給食を食べた量 (絵を塗って食べた量を示す)、服薬の確認、排泄の時間について記入できる欄が設けられており (選択肢も含む)、さらに、学校からの連絡事項も記入できるようになっていた。これらの項目を用紙の片面に印刷したものを 1 日分とし、それらをファイルに綴じたものを使用した。

6. 倫理的配慮

本論文で、A 児の保護者への連絡帳での支援を取り上げるにあたり、A 児の保護者から公表の同意を得た。

7. A 児の困った行動とその内容

保護者が 1 年間で連絡帳に記入した困った行動の中で、担任の教師が連絡帳に支援を記入した困った行動について、1)～5) に示した。また、各困った行動について、保護者が連絡帳に記入した日付と内容の一部を示した。

1) 使用済みのティッシュを新しいティッシュの箱の中に戻したり、使用済みのタオルを使用していないタオルの引き出しに戻したりする行動 (以下、ティッシュ・タオル戻し行動とする)

X 年 7 月 6 日:「片付けにこだわっていて、物の収納場所などはよくわかっていて、すぐに片付けに行くのですが、ティッシュやウェットティッシュの使用済みの物

まで元の場所へ戻してしまうのでちょっと困っています。使用済みはゴミ箱へ入れさせる何かよいアイディアはないでしょうか? ゴミ箱から拾って戻すこともあります」ティッシュにおける元の場所とは、未使用のティッシュが入った箱のことを示す。

X 年 7 月 8 日:「汚れたタオル類を使用していないタオルの引き出しに入れてしまったり、・・・」

2) 父親にひっかいたり、爪を立てたりする行動 (以下、爪立て行動とする)

X 年 11 月 4 日:「最近主人に対してひっかいたり、ツメをたてたりしていて、ニコニコ笑いながらやっているのですが、本人は、遊んでいるつもりなのだと思うのですが、それはいけないことだと根気よく伝えていくしかないのでしょうか? 何かよい方法があれば、おしえて下さい」

3) 食事の場面で、食べ物の入った自分のお皿をひっくり返してしまう行動 (以下、お皿ひっくり返し行動とする)

X + 1 年 1 月 25 日:「食事の場面で皿をひっくり返してしまう行動が度々あり、まだ、食べたいくせにひっくり返したりしていたのでわかりました。夕食の塩焼きそばがフライパンに入っていたのですが、本人は少し食べたからいいものの、私が目をはなしたすきに、コンロの上に全部ひっくり返してしまっていて、またまたしかってしまいました。これはさすがに本人も“しまった”と思ったようで、まじめな顔でごめんなさいをしました。いつもより少し食事の量は少なめでした。左上の歯が少しぐらついているので、そのせいもあるかなと思います」

X + 1 年 1 月 27 日:「夕食時に、度々器をわざとひっくり返して食べ物をテーブルの上におちまけてしまうことが続いていて、ひっくり返してもよいと思ってほしくないのですが、ひっくり返してしまったり、一度片づけて、しばらく食べさせないようにしているのですが、昨日は、おなかはずいているのに、ひっくり返してしまい、食べることができず、イライラしたり泣いたりしていました」

4) ヒーターの電源を頻繁に切る行動

X + 1 年 2 月 8 日:「ヒーターは毎日、ヒーターをつけてほしい時に「ヒーター」と私に言ってきますが、電源を切ることにごこだわっていたりするので、ヒーターをつけてもまたすぐ消してしまうので、日に何回も「ヒーター」と言ってくるようになります。練習になっていいかな? と思っていますが、ヒーターをつけたり消したりしすぎるので、壊れてしまわないかちょっと心配です」

5) ペットボトルのお茶やジュース (冷蔵庫に入っている物も含む) を流しに捨ててしまう行動 (以下、ペットボトル流し行動)

X + 1 年 2 月 25 日:「昨日学校でもお茶をジャーっと流してしまったようですが、ことばの教室へ行く車中でも、りんごジュースをわざとジャーっとフロアマットにこぼしてしまい困ってしまいました。最近、家でペットボトルのお茶やジュースを流しにジャーっと流してし

まうことが多く困っています。昨日も、私がトイレに入っている間に冷蔵庫の中のジュースを流しにジャーっと流してしまい、感情的におこってしまいました」

8. A 児の困った行動への支援

以下に、保護者が記入した A 児の困った行動に対して、担任の教師が記入した支援の概要を示した。なお、ここで記述した内容は、各困った行動において、1 回以上の連絡帳のやり取りで、支援者が記入した概要をまとめたものである。なお、各困った行動の横に括弧書きで記入した日付は、その困った行動の支援を初めて記入した日付を示した。

1) ティッシュ・タオル戻し行動 (X + 7 月 6 日)

これまで、A 児の困った行動の周期が、1 か月程度でなくなっていることから、今回の行動も約 1 か月でなくなるのではないかという見通しについて記入した。また、他の困った行動も始まりと終わりをメモしておくことで、次回同じ困った行動が起こっても、期間を予測でき、こちらも余裕が生まれることを記入した。その上で、ゴミ箱からゴミを拾えないように工夫するか、A 児の手の届かないところにゴミ箱を設置するかについて記入した。

さらに、使用済みのティッシュの写真を貼り付けたゴミ箱を A 児のわかりやすい場所に置いて「捨てる」ということを教え、新しいティッシュの箱は、A 児のわからないところに置いて、必要な時、必要な分だけ渡すことを記入した。タオルについては、いつもタオルがしまっており使用済みのタオルを入れるカゴを置き、タオルを使ったらここに入れてと教えれば、同じ「しまう」でも、困った行動ではなく、片付け行動やお手伝いとなることを記入した。

2) 爪立て行動 (X 年 11 月 4 日)

行動は、①何かを伝えたい (嫌なことや、不快なことを伝えたい)、②大人の反応を見て楽しんでいるなどの理由があることを記入した上で、①の場合は、コミュニケーション手段を教えること、②の場合は、違う形でより楽しめるものを見つけること、行動が起こった時は、過剰に反応せず制し、手を握りなおすといった一貫した対応が必要なことを記入した。また、私たちだったら、嫌な時、やめたい時、「嫌」と他の人に声で伝えることができること、自分の気持ち切り替えるため、好きなことをしたり、一人になったりするので、これらを A 児にどうやって保障するかを記入した。A 児は既に自分の部屋に走って 1 人になったり、紐をぶらぶらして自分なりに気持ちの安定を図っていたりすること、拒否の気持ちを伝えるには、絵カードの「×」を利用する学習を行うことを記入した。

3) お皿ひっくり返し行動 (X + 1 年 1 月 27 日)

この行動は、A 児にとって今はいらぬ、自分が欲しくないという意思表示の一つかもしれないこと、お腹がすいていても気持ちが不安定な時は、ひっくり返すことがあること、大切なことは、その行動をしたら食べな

くてよいということを学習してしまわないように、環境設定しておくことが大切であることを記入した。その上で、「×」印が貼られたトレイ (以下、「×」トレイとする) の上に、いらなくなった食べ物が入ったお皿を置く練習をすること、ひっくり返すという行動で「いらぬ」を示さないように置いたらすぐに片付けることを記入した。そして A 児が食べ物をひっくり返したり、「×」トレイの上に置いたりした時は、自分の物はいらぬということなので、母親の食べ物を A 児に取られないようにすることを記入した。さらに、また食べたくなったという意思表示をするために、「ご飯カード」を作り、それを A 児が持ってきたら、改めて先ほど食べ残したものをもう一度出すか、すぐに出せそうな他の食べ物のカードを作っておくことも記入した。

4) ヒーターの電源を切る行動 (X + 1 年 2 月 8 日)

ヒーターと発音する機会が増えることに共感した上で、ヒーターの電源 (コンセント) を抜くなら、その部分をすぐには抜けないように固定すること、電源のスイッチを押すなら電源のスイッチを押さないように、スイッチに蓋を付けてその上からガムテープを貼って固定しておくことを記入した。A 児はスイッチを切ることが無理だと思うと触らなくなることを伝えた。ただし、他のところで、新たなこだわりが出るかどうかについて、注意深く見守ることも記入した。

5) ペットボトル流し行動 (X + 1 年 3 月 1 日)

A 児の努力 (学習) として、ペットボトルがある冷蔵庫内の棚に赤で「×」を付けておき、触ろうとしたら「×」を指差して「バツ、触らない」と伝えること、環境調整として、キャップを硬く締めて開けにくくすることを記入した。このことについて、人間の行動は、環境 (人も含む) と個人の相互作用で成り立つもので、常にこの 2 つを調整していかなければならないことを付け加えて記入した。

次に、キャップを硬く締めて開けにくくした場合、余計にがんばって強い力で何本か開けようとするか、そんなにがんばって開けるのも嫌だから開けなくなるかの 2 通りがあることを記入した。これに関して、ある行動を減らす支援の過程で一時的に行動の頻度が上がる簡単な例を挙げて、消去バーストを説明した。例として、自動販売機にお金を入れボタンを押したが、ジュースが出てこない (消去)、そうすると私たちは、もう一度ボタンを押し、さらにボタンを連打し、返金のレバーをカチャカチャしてしまうことを記入した。そして、次第に諦め、その自動販売機にお金を入れることも、ボタンを押すことも、近付くこともなくなる (消去) ことを記入した。また、「もう一度ボタンを押し、さらにボタンを連打し、返金のレバーをカチャカチャしてしまう」部分がバーストの部分で、この部分でジュースが出てくるなど、少しでも子供に譲ってしまうとさらに行動が増して、ボタンの連打が増えてしまうことを記入した。加えて、行動の

予測がつくと、少しだけA児の行動を優しく見守ることができていることを記入した。

さらに、保護者は、A児がペットボトルの中身を流してしまった後の対応で、あまり反応しすぎてはいけなと思っています、思わず大声で叫んでしまうことや、叱ってしまうことがあると記入した。そこで担任の教師は、ペットボトルの中身を流されてしまった場合、流された後の大人の反応が大切であることを確認し、普通の顔をして、素早く片付けてしまうことがよいことを記入した。そして行動の機能について、要求、逃避、注目、感覚があり、複数混ざり合っている場合もあること、ペットボトル流し行動は、A児のその行動の直後の様子から注目の要素が強いことを記入した。

次に、なぜペットボトル流し行動が起きたのかについては、保護者が古いペットボトルに入ったお茶を流しに捨てるのをA児は興味深く見ていないかということと、初めは保護者の行動を模倣して行いが、その行動に伴い、捨てた水の跳ねや音が良くてペットボトル流し行動が強められたと推測されると記入した。

また、保護者は、ペットボトルのキャップを硬く締めると、学校でお茶を本当に飲みたい時に、飲むことを諦めてしまわないか、少し心配であることを記入した。そこで担任の教師は、学校でA児がペットボトル流し行動を多く行う時間帯（1時間）を把握できていたため、その時間だけ限定してキャップを硬く締めること、ペットボトルのキャップを硬く締めても、A児は自分でキャップを開けてお茶を飲んでいること、キャップを硬く締めていない時も、キャップが開かない時は、A児は、担任の教師のところにペットボトルを差し出して笑顔を見せることで、担任の教師がキャップを開けるとお茶を飲むことを記入した。このような要求のコミュニケーションは、給食の時間も、皿を担任の教師に差し出すことで、おかわりを伝えることができていることも記入した。

9. 事後アンケート

A児の担任の教師ではなくなったX年+1年4月に、A児の保護者に連絡帳での困った行動を低減させるための支援についてアンケートを実施した。アンケートは、「昨年度の連絡帳をやりとりする方法での支援に関して、以下の項目について、「1. 非常にそう思う」から「5. 全

くそう思わない」のいずれかに、○をつけてください。」と質問した。12項目を5件法（「1. 非常にそう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらでもない」「4. あまりそう思わない」「5. 全くそう思わない」）で回答してもらった。さらに、「A児が不適切な行動を起こした時、連絡帳の支援が始まる前（4年生以前）と、始まった後（現在）で、お母さんがA児の行動を見る見方や、支援方法、心のゆとりなどに変化がありますか。あればお書き下さい」と、「今後、勉強したいことがありましたら、お書き下さい」という質問で自由記述を求めた。

Ⅲ. 結果

保護者は、毎日連絡帳の裏まで記入した。また、担任の教師は必要に応じて、裏まで記入することがあった。なお、担任の教師は、学校での日々の教育活動の合間に、連絡帳を記入する時間を見つけて記入したため、連絡帳の記入にどれくらいの時間を費やしたかの時間を計ることはできなかった。

1. 各困った行動への応用行動分析学に基づく支援の分類と回数

A児の家庭での困った行動に対して、担任の教師が連絡帳に記入した応用行動分析学に基づく支援の分類と回数を表1に示した。支援した回数では、「事前の環境調整を行う（先行刺激の操作）」が4回、「困った行動と同等な機能の適切なコミュニケーション行動を教える」「困った行動の後に強化となる出来事を随伴させない（消去）」が2回であった。「事前の環境調整を行う（先行刺激の操作）」では、「物理的に困った行動を起こりにくくする」（ティッシュ・タオル戻し行動、お皿ひっくり返し行動、ヒーターの電源を切る行動、ペットボトル流し行動）、「視覚支援を行い適切な行動を形成する」（ティッシュ・タオル戻し行動、お皿ひっくり返し行動）、「視覚支援を行い困った行動を起こりにくくする」（ペットボトル流し行動）があった。

2. 各困った行動への支援の結果

連絡帳を通して支援した家庭での困った行動に対して、保護者が連絡帳に記入した内容から結果となる部分をまとめた。なお、結果に記述してある期間については、

表1 A児の家庭での困った行動に対して、担任の教師が連絡帳に記入した応用行動分析に基づく支援の分類と回数

困った行動	支援の分類		
	事前の環境調整を行う (先行刺激の操作)	困った行動と同等な機能の 適切なコミュニケーション 行動を教える	困った行動の後に強化とな る出来事を随伴させない (消去)
ティッシュ・タオル戻し行動	○		
爪立て行動		○	○
お皿ひっくり返し行動	○	○	
ヒーターの電源を切る行動	○		
ペットボトル流し行動	○		○
回数	4	2	2

著者が連絡帳の日数を数え加筆した。

1) ティッシュ・タオル戻し行動

ティッシュ戻し行動については、担任の教師が連絡帳を記入した日から、保護者は新しいティッシュの箱を隠したと記入があった。その結果、A児は、使用済みのティッシュを見つけて新しいティッシュの箱に入れようと探したが見つからず、A児自らゴミ箱に入れることができたという報告があった。そして、この方法で、しばらく様子を見てみるという記入があった。タオル戻し行動については、外から中身が見えない容器を、使用済みタオル、バスタオル入れとして設置し、そこに入れる練習をしてみるという記入があった。また、外からタオルが見えてしまうと、再びタオルの引き出しに入れて戻したいという気になってしまうから、中身が見えないようにするという記入があった。

2) 爪立て行動

教師からの連絡帳の内容を読んで保護者は、主に①嫌なこと、不快なことがあり拒絶したい、②大人の反応を見て楽しんでいるなどで爪立て行動がみられることが多いと記入があった。爪立て行動への夫の対応についても、リアクションの仕方がかえってその行動を強めており、A児の行動をエスカレートさせてしまっている時があるという記入があった。そして、あまり大きなリアクションはせずに爪立て行動を止めさせて「痛い、それは違う」と伝えて、好ましい行動に置き換えていきたいことを報告した。爪立て行動は1か月強の期間を経過し、ほとんどなくなったと報告があった。

3) お皿ひっくり返し行動

ひっくり返し行動については、トレイや「×」（いらぬ）カード等を用意して行っており、まだ思うように支援できないが、以前より改善されつつあると報告があった。また、おやつ場面で、いらぬカード（×のカード）を用意しているという記入があった。

4) ヒーターの電源を切る行動

ヒーターの電源を切る行動は1か月弱の期間を経過した後、A児が久しぶりに「ヒーター」と言ってきたので、

保護者がヒーターをつけると、前に座ってずっと温まっていたと報告があった。

5) ペットボトル流し行動

ペットボトル流し行動では、キャップを硬く締めておくことで、開けるまでに時間を要し、1回は流されたが、何回かは未然に防ぐことができたという報告があった。ペットボトル流し行動は、1週間程度で低減していき、15日程度でみられなくなったと報告があった。また、大人がペットボトルのお茶を捨てる時や、ペットボトルをゆすいでいる時によく見ていること、大人の行動を模倣して始まったと思われるという記入があった。

3. 保護者が行ったその他の困った行動への支援

その他の困った行動では、X年+1年2月14日に、大人が付けていたテレビのスイッチをA児が切り、父親が「消すな」と叫びテレビをつけなおしても、A児は笑顔でまた消すということを繰り返していたと記入があった。そのことに対して母親は、父親のリアクションがA児の行動を強めてしまっていることを父親に伝え、父親があまり反応しないようにするとテレビを消す回数が低減したと報告があった。

4. 保護者が行ったその他のA児への支援

保護者がお風呂の写真カードを作成した。X年12月14日に、A児がお風呂カードを保護者に手渡ししてお風呂に入ったと報告があった。X年12月16日にも、A児がお風呂カードを保護者に持ってきたので、急いでお湯はりをしたと記入があった。また、X年12月20日には、A児がお風呂カードを保護者に持ってきた時、保護者が「おふろ」と言うと「おふ」と真似て言うことができたという報告があった。さらに、保護者はガスファンヒーターの写真カードを作成した。X年12月24日に、A児がガスファンヒーターをつけて欲しい時に、保護者はカードを持ってくるように促した。その時、保護者が「ヒーター」というと、「ヒ」と「イ」の間のような発音で、保護者の口元を真似て言うことができたという報告があった。

5. 事後アンケートの結果

事後アンケートの結果を表2に示した。なお、アンケー

表2 事後アンケートの質問項目と結果

質問項目	保護者が回答した選択肢
1. 連絡帳で示した支援方法は、A児の不適切な行動を理解することに役立った	1. 非常にそう思う
2. 連絡帳で示した支援方法は、A児の不適切な行動を減らすことに役立った	1. 非常にそう思う
3. 連絡帳で示した支援方法は、A児の適切な行動を増やすことに役立った	1. 非常にそう思う
4. A児の不適切な行動が増えることは、理由があると思う	1. 非常にそう思う
5. A児の不適切な行動の周期（いつ始まって、いつ終わるのか）をおおよそ見通すことができるようになった	2. ややそう思う
6. お母さん自身、A児への支援方法に関する知識が増えた	1. 非常にそう思う
7. 連絡帳で示した支援方法（行動の見方や考え方）は、これからも他の場面に応用することができる	1. 非常にそう思う
8. 連絡帳に家庭におけるA児の行動（様子・回数・強度）を書くことは、無理なくできた	2. ややそう思う
9. 連絡帳に家庭におけるA児の行動を書くことで、教師から適切なアドバイスをもらうことができた	1. 非常にそう思う
10. 連絡帳に家庭におけるA児の行動を詳細に書くことによって、子どもの様子が分かりやすくなった	1. 非常にそう思う
11. 連絡帳を通して学んだことは、A児を支援していく上で、今後も役立つと思う	1. 非常にそう思う
12. A児の行動を記録にして表すことは、今後も続けたいと思う	1. 非常にそう思う

トの質問項目に対象児の名前が書かれている箇所については、A児と修正して記述した。保護者は、すべての質問項目で「2. ややそう思う」以上になり、10個の質問項目で、「1. 非常にそう思う」と回答した。また、「A児が不適切な行動を起こした時、連絡帳の支援が始まる前（4年生以前）と、始まった後（現在）で、お母さんがA児の行動を見る見方や、支援方法、心のゆとりなどに変化がありますか。あればお書き下さい」という自由記述では、「支援が始まる前と後では、明らかに変化がありました。行動を見る見方は、より冷静に詳細に見るようになりました。以前は、目の前の困った行動に目を奪われて、なぜそのような行動をとるのかという理由を考える余裕がなく、しかってしまったりしていました。A児の行動の良い面を以前よりたくさん見つけることができるようになりました。ほめてあげられる場面が増えました。支援方法は、先生からの的確なアドバイスにより、より具体的に実践的に見えるようになり、よい結果（成果）が得られることが多くなりました。心のゆとりに関しては、以前よりも見通しを持って行動を見れるようになり、少しゆとりが持てるようになりましたが、性格的な問題で相変わらずいっばいっばいになることが多いです」と記述した。なお、自由記述に対象児の名前が書かれている箇所については、A児と修正して記述した。「今後、勉強したいことがありましたら、お書き下さい」という自由記述では、「障害（知的障害を持った子どもの言語発達について、発達について、引き続きABAの勉強、PECSについて（更に詳しく）」と記述した。

IV. 考 察

本研究では、特別支援学校に在籍する子供の保護者が連絡帳に記入した子供の家庭での困った行動についての相談に、担任の教師が連絡帳を記入して回答する形で、応用行動分析学に基づく支援を保護者に伝えた。保護者は記入されたことを基に、家庭で子供に支援を実施した結果、すべての困った行動が低減した。併せて、事後アンケートでは、今回の連絡帳を通した保護者支援に対して肯定的な回答を得た。また、保護者が子供の困った行動に対して、応用行動分析学の視点を活用することが可能になってきたことを示唆する記述がみられた。これらの結果から、特別支援学校での連絡帳を通した家庭での子供の困った行動の低減を目的とした応用行動分析学に基づく保護者支援について、その効果と課題を検討した。連絡帳を利用している特別支援学校では、毎日、保護者と子供の情報を交換できるため、家庭での子供の困った行動についての保護者からの相談もしばしばみられることがある。保護者からの相談に迅速に回答できることも連絡帳のメリットの一つであろう。今回の連絡帳を通した支援では、5つの困った行動の3つで、保護者が連絡帳に家庭での子供の困った行動を記入したその日のう

ちに、担任の教師が行動の見方や考え方、困った行動を減らす支援を記入した。残りの2つは、5日以内に記入した。困った行動への迅速かつ適切な支援は、連絡帳を通して行える支援の一つだといえる。また、保護者と連絡帳のやり取りにおいて、家庭で保護者が子供を支援する様子を把握でき、保護者の適切な行動に関して賞賛することができる。岡村（2015）の研究においても、連絡帳を活用することで、担任の教師は、保護者が日々の家庭で取り組んでいる指導の様子を知ることができ、フィードバックができることを挙げている。この迅速な支援が、子供の家庭での困った行動の増加や悪化を防ぎ、困った行動の低減につながったと考えられる。

次に、連絡帳を通した応用行動分析学に基づく支援の中で、どのような支援が有効であったかを検討した。今回、連絡帳を通して行った支援の分類では、「事前の環境調整を行う（先行刺激の操作）」「困った行動と同等な機能の適切なコミュニケーション行動を教える」「困った行動の後に強化となる出来事を随伴させない（消去）」があった。連絡帳を通して、これらの支援を保護者に具体的に伝えたことで、A児の困った行動は低減した。また、事後アンケートからは、これらの支援が、「2. A児の不適切な行動を減らすことに役立った」「3. A児の適切な行動を増やすことに役立った」という質問項目に対して「1. 非常にそう思う」と回答した。連絡帳を通して家庭での子供の困った行動への支援では、先行刺激の操作や困った行動と同等な機能の適切なコミュニケーション行動を教えること、消去が有効であると考えられる。ただし、消去を行う場合には、今回、連絡帳に具体例を挙げて記入したように、消去バーストについても丁寧に説明し、保護者が子供の行動の予測し、見守ることができるようにする必要がある。今後の課題としては、今一度、ポジティブ行動支援（positive behavior support: PBS）（庭山, 2020; 大久保・辻本・庭山, 2020）の視点から本研究の支援を見直し、困った行動を低減するための支援にとどまらず、困った行動と両立しない望ましい行動が増加する支援をさらに追加することで、困った行動を相対的に低減していくことが重要である。現在、保護者は家庭も含めて、写真カードでA児が要求を伝える支援や、A児の音声言語を増やす支援を行っている。A児のコミュニケーション手段を広げることで、自己選択、自己決定の機会が増え、それが、困った行動の低減にもつながると考えられる。今後、保護者が家庭で無理なくできる支援について追及していく必要がある。

さらに、担任の教師が保護者に連絡帳を通して家庭での子供の困った行動への支援を行った結果、保護者から、「X年+1年2月14日に、大人がつけていたテレビのスイッチをA児が切り、父親が「消すな」と叫びテレビをつけなおしても、A児は笑顔でまた消すということを繰り返していた」という子供の困った行動に対して、

「父親のリアクションがA児の行動を強めてしまっていることを父親に伝え、父親があまり反応しないようにするとテレビを消す回数が低減した」という報告があった。これは、子供の困った行動が父親のリアクションによって強化されていることに保護者が気づき、注目要求の機能がある困った行動に対し、消去の手続きを適用したといえる。この困った行動より前に、連絡帳で担任の教師から爪立て行動(X年11月4日)を低減するための支援があり、保護者は、同じように父親の注目要求の機能を消去の手続きにより爪立て行動を低減した。このように、家庭において、似たような場面で子供の困った行動が生じた場合、保護者自身が応用行動分析学の視点で困った行動をみることができるようになってきたと考えられる。また、事後アンケートでも「4. A児の不適切な行動が増えることは、理由があると思う」「7. 連絡帳で示した支援方法(行動の見方や考え方)は、これからも他の場面に応用することができる」という質問項目に対して、「1. 非常にそう思う」と回答した。また、自由記述では「行動を見る見方は、より冷静に詳細に見るようになりました。以前は、目の前の困った行動に目を奪われて、なぜそのような行動をとるのかという理由を考える余裕がなく、しかってしまったりしていました」と記述した。これらのことから、保護者は、担任の教師からの家庭での子供の困った行動への連絡帳での支援を基に、A児の困った行動への支援を実施することで、困った行動が起こるきっかけや、その行動が維持されている原因について考えることができるようになったと推測される。これにより、保護者自身が、他の困った行動が起こった場面でも、応用行動分析学に基づく視点から考えた支援を実行できるようになってきたことが示唆された。

一方で、特別支援学校での連絡帳を通した家庭での子供の困った行動の低減を目的とした応用行動分析学に基づく保護者支援の課題も考えられる。1つ目として、担任の教師が応用行動分析学の知識や、実践経験がないと保護者の相談に回答することが難しいことである。つまり、担任の教師が代わると、この支援が続けられなくなる可能性がある。この課題については、応用行動分析学に基づく支援を学ぶ教員研修(半田・加藤, 2021; 加藤・小笠原, 2017)を計画的に実施し、学校で応用行動分析学が学べる研修体系を構築することが有効である。

2つ目として、連絡帳のみの支援であると、保護者、担任の教師の双方に、必要な情報が限られてしまう場合があり、適切な支援の開始が遅れてしまう場合がある。また、文面だけでは、保護者が子供にどのように支援していけばよいかわかりにくいこともある。連絡帳でも、追加の用紙を準備し、そこに担任の教師が支援の手順や環境設定の絵等を記入することができる。しかし、支援場面のロールプレイは難しく、詳細な支援の手順や細かい部分の確認はできない。その場合、支援の手順や細かい部分の確認は電話で行ったり、ロールプレイ等は面談

やWeb会議サービス等を利用したりして、支援を補完していくことも考えられる。

3つ目として、担任の教師が記入したすべての応用行動分析学に基づく支援を保護者が実施したかどうかなどの細かな手続きや、困った行動がどのように低減していったかなどの数値的なデータを収集することができなかった。したがって、本研究では、担任の教師による保護者への連絡帳での支援を独立変数、子供の困った行動の生起頻度を従属変数とした一事例実験デザイン(single case experimental design)(Barlow & Hersen, 1984)での検討が行えなかった。効果の分析は、保護者が連絡帳に記入した家庭での子供の困った行動の様子に関する情報や、保護者の主観的評価のみにとどまっている。岡村(2015)では、担任の教師による保護者へのコンサルテーションにおいて、保護者の日々の記録結果を基に、適切な対応の賞賛や、手続きの確認、修正を行うことにより、子供の適切な行動の獲得がみられたとしている。また、記録行動の維持は、担任の教師の肯定的なフィードバックが影響していることを示唆した。子供と保護者への確かな支援を行うために、教師はより客観的な記録により、支援の効果を検証していかなければならない。今後は、担任の教師が、保護者に無理のない範囲で記録行動を促し、肯定的なフィードバックをしていくことが必要だと考えられる。

付 記

本研究は、日本LD学会第20回大会で発表したものを加筆・修正したものである。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたA児とA児の保護者に心より感謝申し上げます。

文 献

- 阿部美穂子・佐々木由奈・松田麻美(2018)小学校特別支援学級で使用する連絡帳における子育て支援機能の事例的検討。北海道教育大学紀要(教育科学編), 69, 93-107.
- 浅井佳士・山下八重子・加瀬由香里(2020)自閉スペクトラム症児をもつ母親が抱える困難感と問題対処行動に関する文献研究—心理的支援に焦点を当てて—。明治国際医療大学誌, 23-24, 13-23.
- Barlow, D. H. & Hersen, M. (1984) *Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change* (2nd ed.). Pergamon Books, Oxford, UK. 高木俊一郎・佐久間徹監訳(1988)一事例の実験デザイン—ケーススタディの基本と応用

- 一、二瓶社。
- Frost, L. & Bondy, A. (2002) *The Picture Exchange Communication System training manual* (2nd ed.). Pyramid Educational Consultants, Newark, Delaware. 門眞一郎監訳(2005)絵カード交換式コミュニケーション・システムトレーニング・マニュアル—第2版. NPO 法人それいゆ.
- 半田 健・加藤哲文 (2021) 機能的アセスメントに基づく行動支援計画の立案に関する知識獲得を標的とした研修が知的障害特別支援学校教員にもたらす効果. 障害科学研究, 45, 199-210.
- 生澤雅夫・松下 裕・中瀬 惇(編)(2002)新版K式発達検査 2001 実施手引書. 京都国際社会福祉センター.
- 一般社団法人日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会 (2020) ペアレント・トレーニング実践ガイドブック. 厚生労働省, <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000653549.pdf> (2023 年 10 月 3 日閲覧).
- 加藤慎吾・小笠原恵 (2017) 知的障害特別支援学校の教師が行動問題支援過程において直面する困難の検討. 特殊教育学研究, 54, 283-291.
- 宮武宏治・高原 望・足立由美子 (1989) 障害児教育で使用される連絡帳に関する調査研究. 特殊教育学研究, 27, 67-73.
- 中川宣子 (2013) 家庭・学校の連携による教育的なニーズに対応した指導・支援Ⅱ—「連絡帳」の活用—. 京都教育大学教育実践研究紀要, 13, 185-191.
- 中丸 茂 (2008) 行動と認知の随伴性. 駒澤大学心理学論集, 10, 65-72.
- 庭山和貴 (2020) 中学校における教師の言語賞賛の増加が生徒指導上の問題発生率に及ぼす効果—学年規模のポジティブ行動支援による問題行動予防—. 教育心理学研究, 68, 79-93.
- 岡村章司 (2015) 特別支援学校における自閉症児に対する保護者支援—母親の主体性を促す支援方略の検討—. 特殊教育学研究, 53, 35-45.
- 岡村章司 (2016) 高いストレスをもつ保護者による行動問題を示す自閉症児への家庭での介入を促す支援方略の検討—強みに基づくアプローチを通して—. 特殊教育学研究, 54, 257-266.
- 大河内浩人 (2007) 第 I 部 解説編 1 行動分析の基礎知識—本書を理解するために—. 大河内浩人・武藤 崇(編), 心理療法プリマーズ 行動分析. ミネルヴァ書房, 3-12.
- 大久保賢一・辻本友紀子・庭山和貴 (2020) ポジティブ行動支援 (PBS) とは何か?. 行動分析学研究, 34, 166-177.
- 大西ゆみこ・丹治敬之 (2019) 特別支援学校における自傷行動を示す自閉症スペクトラム障害児への Positive Behavior Support (PBS) に基づく実践—自傷行動の低減と朝の会への参加を目指した取り組み—. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 9, 151-165.
- Weiss, J. A., Cappadocia, M. C., MacMullin, J. A., Viecili, M., & Lunsy, Y. (2012) The impact of child problem behaviors of children with ASD on parent mental health: The mediating role of acceptance and empowerment. *Autism*, 16, 261-274.
- 山本淳一 (2019) 応用行動分析学における計測と制御. 計測と制御, 58, 409-414.

受付年月日 (R5.8.31)

受理年月日 (R5.11.1)